

六花



RIKIWA

4

俳句雑誌りつか
2015 (平成27年)

cover design Yuna Mizuno

こん
今

雪の端

山田六甲

青空へ桜の樹から桜さき
膝深く喘ぎて雪の端つかむ
雪の田に顔を印して帰りけり
飼鯉に氷らぬ水の寒からむ
島裏に眠りを深く雪女郎
鴨去にし湖月に夜を明かしけり
花の坂道の下から水の声
白梅に北斗七星立ちにけり
断崖に咲いて怒濤の雪柳
浅井姫あざいひめに笛たてまつる春の鳶
石ひとつあれば渦巻き花筏

湖昏れて遠くへ鳴けるかいつぶり
くぐりては群をはぐれぬかいつぶり
ことごとく石山寺の枯れに入る
しぐるるや逢坂山の峠越え
本殿のなにやら啞へ初鴉
初霜や仏師の庭のかぐはしき
恵方へとさびしき道を通りけり
大綿を払うて手持ち無沙汰かな
色足袋にはきかへ母の顔となる
箸とめて夫のみてゐる春著かな

雪卿集

実南天

永田万年青

蠟燭に火を点ともしくれ年始客
鼻歌の二つ三つ出て初湯かな
日記買ふ空白の日をつくらじと
星ひとづ福笹肩に千鳥足
一枝に犇めきぬたる実南天

四方拝

松本文一郎

年の市売り手買ひ手の気合かな
着ぶくれて時短路線を探しをり
腰伸ばす腰掛石や冬ぬくし
戦なき世界を願ひ四方拝
初詣上り下りの手摺かな

雪卿集

福 笑
志方 章子

うますぎて誰も笑はず福笑
母らしき人の夢見の寒さかな
この頃は旨しと思ふ干菜汁
山茶花の翳^{かす}みてきたる齒の痛み
山茶花の蕊^{しべ}の硬きに驚きぬ

初 雀
市川伊團次

出歩くも酒を友とし三箇日
初雀何をそんなに鳴きをるや
一景や一ノ谷より初茜
初景色流れのままに川の影
おお寒^{さむ}独語に我を笑ひけり

亀鳴けばゆつくりのびる生命線

貝森 光洋

かめなけばゆつくりのびるせいめいせん かいもり こうよう

亀鳴けばゆつくり伸びる生命線

鳥雲にきざみし日々を啜へては

カーテンを冬日の分だけ開けておく

指先に吹き込む命糸編み

花花花花花花で今月暮れる

亀が鳴くのを聴いたら気分もゆつたりしてきた。いやゆつたりしたから亀の鳴くのが聞こえて来たのかも知れぬ。手のひらを見ると生命線がによるに伸び始めて、寿命が延びそうな気がするというのだ。人生も亀の歩みがよろしい、というのに通じよう。ゆつたりすれば寿命が延びる、と直接的な言葉を遣わず、亀が鳴くから生命線が伸びるとしたのは芸。亀鳴くという実態のはっきりしない季語と、伸びている生命線の動きは共に虚でありながら、聞こえたり、目に見えている様な不思議な感覚をもたらしている。

冬晴や舞ひつつ流る鳶一羽

藤生不二男

ふゆばれやまいつつながるとびいちわ ふじおふじお

だんだんにかなくなりぬ手毬唄

笹鳴きのひと声ごとに近づき来

浮びてはもぐりし雨のかいつむり

大鷲の発たむとしたる檻の中

冬晴や舞ひつつ流る鳶一羽

「流る」に一つの真理を掴み取った。

鳶は同じ所で輪を描いているように見える。しかし決して同じ場所の繰り返しではなく、少しずつ流れていると気付く。鳶の輪も、鴨長明が言う徒然草のように、目の前を流れている水は同じ水がずっとそこにあるのではなく、つぎつぎと違った水がやって来ては過ぎ去って行く。またつぎつぎと新たな水が流れてきて目の前の水となる、というのだ。この句も鳶が同じ輪を空に描いているように見えて、決して同じ輪ではなく、鳶は知ってか知らずか、少しずつ流れて横ずれしていると深く悟ったのだ。

雪樹集

マラソン人

溝淵 弘志

バスを待つおはようの声息白き
妻呼べば孫が駆け寄り日向ぼこ
二日分仕事やりとげ柚子湯かな
初雪や深深といふ音聞ゆ
息白しマラソン人と擦れ違ふ

手毬歌

藤生不二男

だんだんになさしくなりぬ手毬唄
笹鳴きのひと声ごとに近づき来
浮びてはもぐりし雨のかいつむり
大鷲の発たむとしたる檻の中
冬晴や舞ひつつ流る鳶一羽

蛍雪譚

六甲選

※ミケランジェロは石の要らない
処を削れば像が出来上がると。

二十七年四月号鑑賞

句会で繰り返し口を酸っぱくして伝えていることは、「とかく俳諧は万事作りすぎは道に叶わず。その形そのまま、又はわが心のまま作りたるはよきと存知候」と芭蕉が書簡で述べていることである。作りすぎはここでも辛口評価。この欄で断りの無い場合「私」とは六甲のこと。

湖昏れて遠くへ鳴けるかいつぶり

笹村 政子

湖の日暮れ。湖はみずうみでなく、うみと読む。「暮れる」を俳人は「昏れる」として黄昏の一字を当てることを好む。文字に雰囲気があるからだ。昏は日が暮れて暗いことで。「昏冥・黄昏」等と使う。俳句一般に、文字によって雰囲気を出すのはいいが文字に凭れてはいけない。この句、湖の日暮れ、鳩（かいつぶり）が遠くに向かつて侘びしく鳴く光景。仮定の話だが、実際には遠くから作者の方へ聞こえて来たとする。それならば「遠くに鳴ける」となるだろう。だがこれでは正直すぎる。もしこれを逆にしたらどうなるかも考えて推敲「遠くへ」としたにちがいない。目の前の鳩が遠くに向かつて鳴いている方が視覚的にも広がりが出てくる。てにをは、でまったく逆の意味になるから、俳句は怖く面白い。これも俳句の醍醐味。秋桜子は「自然の真と文芸の真」を唱えた。俳句は一句出来てハイ出来上がりとするのではなく、二面三面の広がりを考えるのも推敲の楽しみではないだろうか。それが政子には、出来るようになってきた。

六花集

四月号

平居 滯子

重心を失へるまま去年今年
文鎮は翡翠の羊筆始
山岳書に交る句集を読み初むる
帰りなん独居のポスト賀状待つ
籠りゐてポインセチアの赤増しぬ

延川五十昭

踏みしめる玉砂利の音初詣
悉皆屋古き暖簾に京時雨
蜜柑売る露地を曲れば潮香る
大寒や猫の肉球やはらかき
水洩の塩からき味古稀迎ふ

森山あつ子

金柑のこぼれ落つるか色尽きて
年男餅が宙舞ふ鎮守杜
粉雪や卒業証書の手にも舞ひ
曆をば開きて頷きまた頷く
艶やかに湯船の中に柚子二つ

菊谷 潔

吹く風に烏あらがふ冬田かな
身をしづむ湯の熱きかな霽るる夜
小言食い豆腐鬆が立つ踊りだす
湯気旨し鍋は豆腐をあたたむる
寒行や海老芋うまく煮えたかな

谷口 一献

かと言って買はずにおれぬ日記買ふ
大荒れの事より日記始かな
雪しまき大吊橋の果て見えぬ
冬帽子お尋ね者になりにけり
初神籤誰にも見せずしまひけり